

年頭のご挨拶

小泉 英明



新年おめでとうございます。2007年が皆様にとって、また、ご家族にとって、希望に溢れたよき年になることを心から祈念申し上げます。

昨年2006年は、近畿支部ご担当で大阪大学にて第55年会が、そして、東北支部ご担当で秋田大学にて第67回分析化学討論会が開催されました。それぞれ、渡會 仁先生、小川信明先生を始めとする皆様のご尽力下さいました。いずれも、かつてないほど盛大で生き生きとした討論や交流の場となり、会員の方々が大変にお喜びでございました。また、モスクワで開催されたICAS 2006（国際分析科学会議）にて、日本で5年後にICAS 2011を開催することが正式に承認されました。本会を牽引して下さっている諸先生、そして多くの会員並びに職員の方々の御蔭様をもちまして、本会は持続的によい方向へと進んでいると存じます。

さらに、本年を新たな飛躍の年とするべく、日本分析化学会の組織全体を見直し中であります。従来と異なり、理事会に議題を提出する準備段階の常務委員会にも、会長がオブザーバーとして出席させていただいております。本会の重要決定機関である理事会で審議する内容を事前に勉強させていただき、かつ組上に載せる審議項目の選択について、いささかなりとも意見を申し述べることは、本会の方向性をより明確にする上で必要かと存じます。また、筆頭副会長の川畑 明先生が中心となり、組織検討ワーキンググループを発足させ、その中で将来構想を含めて検討いただいて参りました。本年はさらに将来計画を深化させるべく集中討議を行い、本会の発展性をより強固なものに致したく存じます。次期会長の原口紘丞先生も大変に張り切っておられます。会員並びに職員の皆様の皆様のご支援・ご高配を賜りたく、衷心よりお願い申し上げます。

高度技術が日常生活にも広汎に入って参りました現在、分析化学自体はますます重要になってきております。例えば、私たちが健康診断で必ずお世話になる血液自動分析計は、分光分析法やイオン電極分析法がその基本原理であります。2003年度ノーベル生理学医学賞受賞のMRI（磁気共鳴描画装置）は核磁気共鳴分析法がその基本原理であり、このような医療分析分野も分析化学から生まれたと言えるでしょう。また、遺伝子関連分野では、電気泳動法による分離や分光検出、あるいは質量分析法が欠かせません。田中耕一会員の2002年度ノーベル化学賞受賞も皆様ご記憶のことと存じます。こうして見て参りますと、分析化学は、多くの先端科学技術分野のインキュベーター（孵化器）として機能してきたと申せましょう。今は、分析化学から巣立って行った諸分野と連携しながら、分析化学を分析科学（Analytical Science）として広い展開を考える時機にあるかも知れません。

言うまでもなく、分析化学の基本は「分離」と「検出」であります。化学分析も機器分析もこの点は変わりません。分析化学では、科学的アプローチ、すなわち、実証基調（evidence-based）の事実認識（fact-finding）を体得できるので、科学教育の礎（いしずえ）としても極めて大切であります。また、分析の実践の中から、例えば、再現性（reproducibility）や精度（precision）と正確度（accuracy）の違いを体得できます。突っ込んで考えますならば、社会的事象についても事実を正確に把握し、的確な判断をする心の基盤は、分析化学と共通点があると感じます。分析の基本は、相手の立場や本音を正しく理解することにも繋がるのではないのでしょうか。相手の心を正しく理解して初めて、思いやりや、文化多様性を大切にすることが現れてくる。本物の科学者の心は温かいと、私は信じております。いつの日か教育の分野にも、「科学する心」の基本を本会が提供できますならば素晴らしいことと存じます。未来へ向かって飛躍する組織へと発展することを、年頭にあって強く祈念申し上げます。

[Hideaki KOIZUMI, (株)日立製作所, 日本分析化学会会長]